

第1回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル④【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える。速報メモ

■登壇者・担当者

企画担当 : 手島浩之・佐伯裕武・阿部元希
 ファシリテーター : 渡辺一馬 NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター代表理事
 ファシリ補佐 : JIA 佐伯裕武・阿部元希・吉田和人 撮影 : 早坂陽
 報告書まとめ担当 : 佐伯裕武・阿部元希

登壇者

小野田泰明	東北大学工学部建築・社会環境工学科
三部 佳英	一財) 宮城県建築住宅センター顧問
阿部 重憲	(株)地域計画研究所/都市プランナー
佐藤 飛鳥	東北工業大学ライフデザイン学部,経営コミュニケーション学科
青木ユカリ	NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター常務理事事務局長
小貫 勅子	東北大学キャンパスデザイン室
松本純一郎	日本建築家協会 (JIA) 宮城地域会
渡辺 宏	日本建築家協会 (JIA) 宮城地域会

発言者①: (議会も本庁舎も) 本庁舎は窓口機能が無く、立案や管理をする訳だから、業務効率上、市民に来てほしくない筈。しかし、基本構想には「市民に開かれた」という理念がある。まずは「行政手続き上の設計プロセス」をどう市民に開いてゆくかが課題だと思う。

発言者②: 本庁舎は機能的な施設であるので、個人的には本庁舎自体にコミットは難しいと思う。設計プロセスの進め方について、まちづくりやハードが先行し過ぎていると思う。課題解決に重点が置かれ過ぎていて、何のために、何を目指しているのかが分からない。市長などリーダー人たちのコミットが見えないのも大きな課題だと思う。

発言者①: 確かに基本構想には「こんな課題を解決したい」という事は書いているが「その解決の先にどんな街を目指すのか」が書かれていない。現在、仙台市の総合計画が始まっているが、そこでも大きなビジョンが描かれていないまま、計画が進んでいるのだと思う。

発言者③: 「建築まちづくり基本法」の制定に向けての取組みをしており、街並みへの配慮や住民の意見を尊重したまちづくりを目指している。まちづくりのための仕組みについては、英国の事例として CABE (英国建築都市環境委員会) という取り組みがある。様々な分野の専門家が市民に寄り添って決めてゆくプロセスが重要だと思う。

発言者①: 窓口機能が区役所にある中で、この本庁舎は「誰」の為のものなのかを考える必要がある。「市民の声」と言った時に、誰を市民としてとらえるのか、についても考えたい。

発言者④: 若いころの学生運動の流れで、自分がずっと市民参加のトップランナーだと思っていたが、最近は反省している。「市民参加・市民協働」は30年前から全く進んでいない、良くな

っていないと思っている。「市民参加・市民協働」は、現状では、住民が行政に使われる、下請け的な状況でしかないように思う。この本庁舎建て替えは、本当の意味での「参加・協働」の良い舞台となるのではないかと考えている。

発言者⑤：「市民活動サポートセンター」の設立や運営の経験から「市民のことは市民に聞け」「地域のことは地域に聞け」が原則だと感じている。本庁舎建て替えと同時に、周囲の市が所有している建物や、借り上げている建物の更新等が行われる。この場所を中心としてエリア全体で建て替え計画を考えてゆくべきだと思う。この界限への波及効果や影響についても地域の声を聴いた方が良いと思う。

発言者⑥：これまでの行政経験の中では、実施計画や実際の設計段階になってから、様々な方面から計画への批評や指摘を受けることが多い。計画プロセスについて、市民や専門家の意見を計画にフィードバックするような仕組みがないと駄目だと思う。この「基本構想」には、商業や歴史、文化、愛着などへの記述が足りないと思う。仙台のまちを見ると、歴史の重層的な積み重ねによる街並み形成が弱い。建築まちづくりの視点に明確さが足りない。「大きな都市ビジョンがない」というのが大方の意見だと思う。

発言者⑦：この計画は、「構想」なのに、読んで「ワクワクしない」のが大きな欠点だと思う。

発言者⑦：経済学という言葉は「経世済民」が由来である。マーケティングという観点からすると、いろんな年代層から使われる、という事も大切だと思うし、海外では市庁舎が観光拠点になっている場合も多い。「利用者が誰なのか」を、国内からの旅行者や様々な年代の市民など裾野を広げて考えることも大切だと思う。ブランディングという視点から見ると、計画に対して、様々な立場の人が様々な意見が言えてそれが実現してゆくことが重要。

発言者⑧：現在東北地方の大学関係の施設では、「東北放射光施設」の計画があるが海外に視察に行くと、関連して産業を生むような都市計画が成されているが、日本では、使い方の意思をもって都市計画が成されていないと思う。基本構想を見ても、この本庁舎プロジェクトが都市デザイン的にどういう意味を持つのか」についての視点が無いと思う。「仙台市がどういうまちになりたいか」のビジョンが仙台市に無いのではないかと。これまでは市民が意見を言う場が全くなかった。本来であれば基本構想段階でやるべき話だと思うが、こういうシンポジウムを通じてでも、都市ビジョンをつくっていくべきだと思う。計画が具体化しスケジュールが確定した段階ではなかなか様々な意見を取り入れるのは難しくなるので、今後はその前段階でやるべきだと思う。市民が参加するプロセスが無いので市民が本庁舎に縁がないのではないかと。海外の事例を見ると、プロセスをオープンにし多様な意見を取り入れながら計画をまとめるプロセスが出来ている。プロセスにきちんと市民を関わらせることが大切だと思う。

発言者⑨：「計画のフィードバック」と「市民が関われる場所にどうしてゆくか」が重要だということだと思う。

発言者⑨：メディアテークの企画に関わった経験がある。特に発災以降、メディアテーク1階のオープンスクエアが市民に開かれた場になっていると感じる。一般市民が「公共とは何か」を皆で考える、という場所が市役所だと思う。「公共を市民に取り戻す」こと、「都市間競争の中で仙台市をどうやって売り込んでいくか」が重要だと思う。最近行政に対する厳しい目があり、「出来るだけお金を掛けない・贅沢をするな・普通にしろ」という圧力がかかり委

縮して行く傾向にある。「大きな志・ビジョンを持ちながら、物事を具体的に考えていく」ことが大切だと思う。行政と市民や専門家が一緒に負担と責任を負って進むことが大切だと思う。このラウンドテーブルという企画もそういうことを意図しているのではないかと感じる。

発言者①：「都市ビジョンをどうつくるか」「本庁舎をどう考えるか」は、「私たちが公共・自治をどう取り戻せるか」という事が分かった。「多少コストが増えるといったリスクを背負って何かの案を選択する」ことが、市民として責任ある声を上げることが出来るかが重要なポイントだと思う。

<休憩>

発言者①：前半の討議で、どうやら「基本構想がイケていない」らしいことが分かった。その理由としては、市民の側が責任を持ったコメントが出来ておらず、それが故に、行政に不要な枠をはめ込んでしまっている。また、計画が決まったのちにパブリックコメントを求められても実際の計画に反映されないことにも問題があると思う。市民の側も責任を負ったコメントを、計画にフィードバックできるタイミングで出すにはどうすれば良いのかがポイントだと思う。制度や社会の雰囲気や都市ビジョンをつくれない人につくらせているのにも無理がある。都市ビジョンというものをどうやって我々市民がつくるのか？が課題だと思う。そういった場が何度か連続し基本計画に反映されながら進んで行くというのもひとつの方法だと思うが、その辺りについて皆さんに意見がききたい。

発言者⑥：300件近いパブコメの中に、3つのビジョンがあると思う。①市役所の外の空間の話、②市役所とは何かというハードソフトを含めた話、③建物の計画の在り方の話。建て替えと同時に市民広場や定禅寺通、周辺の計画を一体的にやるのが重要だと思う。庁舎規模についてのコメントが多くあったが、別棟の庁舎をどう集約するのかの検討が足りない気がする。公社等と一緒に新庁舎に入ることになっているが、必要なのだろうか。窓口業務は区役所だが、市民協働については本庁舎の機能だと思う。計画プロセスについては、市と受託業者だけでなく、ラウンドテーブルの登壇者やパブコメを出した方などを分科会として位置付け、基本計画に反映し検討してはどうかと考える。

発言者①：今の市役所本庁舎は市民協働し易いのか。或は、今は協働しているのか？

発言者⑤：行政の部局はどうしても縦割りになる。しかし市民の間での問題は横断的なのが問題。それを行政が動きやすいような部局間協働のための職場空間の在り方を考えることも重要だと思う。

発言者①：「本庁舎とは何か」という問いを置き去りにして現在のフロア面積の合計だけで計画しているようにも思える。市民協働し易いオフィス空間はどうあるべきかをもっと考えるべき。無駄に見える空間でも、必要であれば実現すべきだと思う。「20年後に分かる価値」を生み出すために、行政はどうすべきか？

発言者⑦：20年後にここを使う主体である学生や若い世代に考えさせて計画を練るという方法もある。そうやって20年後の需要に応えることが出来る可能性があるのではないか。

発言者⑨：学生はしょせん素人なので「学生が考えて良いものが出る」という事はないと思う。

医学生が重病人の治療をするようなものだと思う。

発言者①：パブコメは、様々な市民や建築の専門家が出しているが、計画にお金と時間を掛けるのは良いことだと思う。

発言者②：みんな誰もがこのプロジェクトに対して、何らかの反対意見を持っていると思う。何故かと考えると、計画をつくるに際しての目的やあるべき姿が見えていないからだと思う。プロジェクトの戦略や、誰がやるかという主体が見えないのも問題だと思う。庁舎自体は機能的であることを求められるが、この庁舎整備をきっかけにエリア全体の価値を上げたいと誰もが思っていると思う。それが未来への贈り物だと思う。それを実現するには3つの方法があると思う。①受託した設計事務所が「ここで出た意見」を形にできる条件整理をする。②もしこれが仙台の未来を大きく左右することであるならば、やはり選挙の争点とする。③庁舎の機能的な部分は受託設計者に任せるとしても、庁舎周りのエリアはみんなで考える仕組みをつくりそれを計画にぶつける、ことだと思う。

発言者④：理想と計画案には差が大きいので、その間をどう埋めるかが課題だと思う。基本計画受託者のプロポ時の提案を見るとかなり具体的な提案をしている。これが実際の基本計画作業に入ると、これに向けてひとつひとつ潰してゆくような作業になると思う。この中でいろいろな提案がなされているが、ソフトを伴わないと実現できないようなものも多い。使いながら考えるようなエリアマネジメントや、プロセスプランニングが重要だと思う。また、問題は「議会」が見えないことだと思う。議員さんもこういう場に出て議会の立場を明確にするべきだと思う。

発言者③：この市役所建替えも「一般市民が公共とは何か？」を考える機会だと思う。行政だけに一方的に負担と責任を押し付けるのでは、あまりにも重すぎると思う。そうでなく、専門家も一緒に考えるのが大切だと思う。こう言う機会を継続して市民を巻き込んでいながら計画にフィードバックしてゆく仕組みが大切だと思う。現在では「シャレットワークショップ」などの取り組みも多く実例がある。日立市役所や府中市庁舎などの新しい取り組み事例がある。「都市ビジョン」というような大きな話は、なかなか市民だけでは考え辛いと思うが、専門家が支援することで、うまく組み上げられると良いと思う。

会場1：「議論する核」がない。「議論する核」が欲しいと思う。市民ホールというのであれば知の集積を進めるだとか、そういったことに取り組んだ方が良い。

会場2：いろんな市民の意見を拾う場というのはもっともあって良いと思う。私は障害者ですが、バリアフリーなどでも計画が大体出来上がってから意見を求められる場合が多い。そうになってしまうと本当に利用者が求める機能が全然入らないものになります。そういう意味でも様々な市民が意見を計画段階から発信できる場をもっと設けて欲しいと思う。

会場3：今後設計が進んでゆく中で、「こういう議論がどう実際の業務内容に繋がってゆくのか」が一番重要だと思う。「発注者側がここでの意見をどう活かしてゆくのか」を明確にする必要がある。

発言者⑥：「パブコメに対する行政の回答」が明確な答えになっていないのも課題だと思う。どうするか明確に答えるべき。

発言者①：「市民の側も責任を負いながら計画を進めてゆく必要がある」という点では皆さんの意見が一致していたと思う。また市役所の建て替えに際し、都市ビジョンがないし、「総合計画

の策定」も同時に動いている。市民の側も責任を負う覚悟が無ければ、つまらない未来しか実現できないことが分かったと思う。また、専門家が入らないと良い議論にならないことも分かった。昨日、一般市民を対象に未来を考えようというワークショップをやったが、結局そこでは「もっとお金が欲しい」という事が多かった。「自分ももう高齢者なので福祉に力を入れて欲しい」だとか「自分の家の近くにバス路線を増やしてほしい」という話を越え、長期的な視野で市民と専門家と一緒に考えることが大切だと思う。

以上

第1回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」

テーブル⑧【日常的な市民利用の視点から】

市民のための「シティホールとは何か」を考える（うつわ）速報メモ

■登壇者・担当者

企画担当 : 川口裕子・奥山和典・氏家清一
ファシリテーター : 榊原進 NPO 法人 都市デザインワークス
ファシリ補佐 : 川口裕子・奥山和典 撮影 : 今野純子・佐藤正徳
報告書まとめ担当 : 川口裕子

登壇者

杉山 丞 東北大学キャンパスデザイン室特任教授
平賀 ノブ 一社) 芭蕉の辻まちづくりの会 代表理事
舩岡 和夫 東北工業大学名誉教授
佐藤 慎也 山形大学工学部建築デザイン学科 教授
内田 有美 NPO 法人イコールネット仙台 理事
澤口 司 (株)スイコー代表/泉青年会議所 OB
横山 英子 あとりえ横山代表/仙台青年会議所 OB
竹下 小百合 Venus Club 仙台支部代表

発言者①: 単なる市役所でなく「シティホール」がキーワードとなっている。単なる市庁舎建て替えてなくシティホールとは何かを議論したい。前半は、自己紹介の中と、「市役所にどれくらいの頻度で来るのか」を質問として設定します。後半は論点を整理し深めたいと思っている。

発言者②: 「NPO 法人イコールネット仙台」で、男女共同参画社会のための活動をしている。市役所にはほぼ行かない。市民のへやに多少行くくらいで、業務としても接点はない。最後に行ったのは震災のあと。

発言者③: 震災後、亘理町に戻り、ひとりで住んでいる。市役所は「宮城地域自治研究所」として今年一度行った。

発言者④: 商工会議所女性会の会長をしていた。ずっと仙台に住んでいる。芭蕉の辻を中心に歴史をどう残すか、みんなで活動している。藤崎から日銀まで道路をつくり上げようとしている。市役所には年に 50 回以上は行っている。

発言者⑤: 木町通小学校建築改築の際に改善に向けた親の会を結成して市役所と交渉した経験がある。その他さまざまな審議会などで仙台のまちづくりに関わっている。そういったことで市役所には通うことも多い。

発言者⑥: 女性だけの繋がる広がる団体をしている。女性のみで 100 名の会員がおり、様々な立場でいる。宮城県沖地震の時に生まれたが、これまで市役所は 3 回ほどしか行ったことが無い。

発言者⑦: 建築不動産業をしており、泉青年会議所 OB。市役所へは小学校の授業で言ったのが最初。

青年会議所に入ってから市長に表敬訪問したりしていた。これまでに 20 回程度行ったことがある程度。

発言者⑧：生まれも育ちも仙台。五代くらい前から仙台なので生粋の仙台っ子。祖父は設計者として前の市役所を建てる時に関わったと聞いた。青年会議所をやっており、観光や文化経済環境教育すべてについて勝手に考え、市役所には通っていた。業務でも市役所営繕課と様々に関わっていた。年に数十回は市役所に通っている。しかし、いち市民として市役所にくることは殆どない。

発言者⑨：大学で建築と都市計画を教えている。山形に勤務しているが泉区民であり、「建築と子どもたち」という活動や「冒険遊び場」の活動もずっとしている。市役所に通うのはそういった場合が多い。

発言者①：市民として市役所に来る人は殆ど居ないが、団体や業務として来る人は案外多い。そんな中で「新しい本庁舎建て替え」はどうあるべきか。基本構想の中では「市民中心の市役所の機能強化」が謳われているが、皆さんの市役所への状況をお聞きすると、これまでの市役所の在り方を変えないと、それは机上の空論になってしまうと思われる。「シティホールとは何か」について、キーワードで良いので書いていただいて、それを元に議論したい。

小休憩

発言者③：隈研吾さんが設計した「アオーレ長岡」は、皆さんご存知でしょうか。これまでにない庁舎だと思っています。「シティホールとは何か」については、「用がなくても足を運んで過ごしたい所（市民であって良かったなあと思えるところ、町民ではまずいぞと思えるところ）」そして「市民として活動したくなる場所」です。この二点が重要だと思います。

発言者①：「足を運びたくなる」というとどういうことでしょうか？

発言者③：東日本大震災で被災して賃貸に住んでいたが、本を読むかテレビを見るかしか楽しみが無かったが、（夜の街は良く知っているが）昼の街は分からないので行くところがない。アオーレ長岡のような広場だといろいろな方とも会えるし、良いと思う。

発言者⑧：組織を持っているとそれを経由して様々な活動が出来るが、「シティホール」とは「組織を持たない個人」が知的なことを勉強したり様々な活動をしたり集うことが出来る場所だと思う。そして市民の課題を解決する機能が必要だと思う。市のホームページも複雑すぎて分かり辛いですが、様々な手続きやサービスをナビゲートしてくれる機能が必要だと思う（区役所は区役所で近くには必要だが、個人的にはすべての機能を区役所に集約するのは良くないと思っている）。仙台の特長は市民以外の人が多いことなので、有事の際には市民以外の人を受け入れることが出来る場所であることが重要。

発言者⑨：「集中と分散」というキーワードを挙げたい。今日のこういう場が市役所にあったら素晴らしいと思う。様々な市民がいろいろな視点から話が出る機会が重要だと思う。海外の事例で、政策をつくる時「分科会をもって 8 人くらいで話し合い、その後全体会でその話をシェアし合う」という仕組みがあり、様々な課題解決の機能を持つことが出来れば良いと思う。こども関係の関わりが多いが、その方面から言うと、子どもたちがまちづくりなどに参画できる場があると良いと思う。

- 発言者⑦：サロンという機能、日常的に集まりやすい場所としての雰囲気重要。専業主婦の方でも急な何かがあった時に子どもを預けられる場所であるとか、介護している時に子どもを預けられたり、そういったコミュニティが生まれながら市民が活動できる場所が必要だと思う。
- 発言者⑥：「共有の場」が必要だと思う。身近な友人に聞くと「市役所って遠いよね、入り辛いよね」と言われた。市役所に行けば何かを得られるようだと思いたい。例えば、子どもを連れてトイレに行くのでも良いと思う。お年寄りでも誰でも「ここに行けば何かがある」と思えるような場所であって欲しいと思う。
- 発言者②：「誰でも使える市役所」を挙げました。授乳室や雨の日に立ち寄れるようなキッズスペースなど、また子育てをしているお父さんたちでも利用しやすいような日常的に使える場所であれば良いともう。仙台市は市民活動が盛んでそういった力が強いので、オープンスペースのような（個人や団体での）様々な活動が出来るフリースペースがあると良いと思う。他には「避難できる場所」があると良い。震災の時には避難できる場所が見当たらず困った経験がある。プライベートが確保できるパーティションや、育児、介護などのニーズも対応した支援が出来るなどの機能があれば良いと思う。「市民と協働が出来る市役所」というキーワードを挙げましたが、市民が主体になって様々な活動が展開できるような市役所だと良いと思う。
- 発言者④：最初に言いたいのは、「東京都庁のようになってほしくない」ということ。色も無機質で、いつ残念に思う。サインも色分けされて分かり易いなどの工夫をして欲しい。「市役所のコンシェルジュをつくって欲しい」とも思うが、それはとにかく人事異動が多く、行くと誰が何処に居るのか、担当者が誰なのか分からない。OBでも良いがそういう役割の人がいると良い。また、インフラとの接点が重要で、分かり易くつくって欲しい。外国人が来た時など「とにかく分かり辛い」との声を聞く。
- 発言者⑤：様々なところで市役所がつけられているが「市民に開かれた市役所」というキーワードが掲げられているにも拘らず、エントランスホールに市民のへやなどの空間が設けられているに過ぎないと思う。そうではなく「行政と市民の関係」を形にすることが一番重要だと思う。例えば、先日市役所に行った際に、この一大イベントである市役所建替えに関する展示パネルが全くないことに驚いた。そうではなく、市は「音楽ホール」や「市役所」などについてどう考えているか、或はスパイクタイヤなどに代表される市民運動の歴史など、過去の歴史から未来へつながる市政の展示ギャラリーがあり、市民はそれが見たいからここに来る、というような市役所ならではのコンテンツを揃えるべきだと思う。展示機能に付随して、市民が質問をしたり考えたり議論したりできる場があると良いと思う。また、そういう市民の動きが議会に吸い上げられ、政策が実現してゆく空間であって欲しいと思う。「市民広場を中心に如何に市民が憩える場にするか」という議論もあるが、それと同時に「如何に市民中心の市政をつくってゆく場にするか」についても考えたい。そういったことを踏まえて「市政の歴史や計画を知り、考え、議論し提案できるような場」というキーワードを挙げた。分かり易く言うと「まちづくりセンター」や「まちづくりギャラリー」というような機能があると良い。シンガポールでもそういった場所が実現しており、それが観光資源となり、市民や子供にも親しまれているので、是非仙台市でもそのような取り組みをして欲しい。
- 発言者③：アオーレ長岡は、議場も体育館もガラス張りです。誰が何しているかも全部わかる。ま

た市役所機能は街に分散しているが、総合案内所のようなところがあり、分かり易いつくりになっている。それを考えると超高層の建物である必要はなく、水平分散型でも十分にやれると思う。英語では、市役所はシティホールだが、県庁はプリフェクチャオフィスなので、市民との距離を考えて、ホールとオフィスを使い分けているのだと思う。

発言者⑤：議会について、もう少し住民参加型の議会にして欲しいと思う。1階にあって、使わない時には様々に使えるようなものであっても良いと思う。

発言者①：そういわれると、議会に傍聴に行くということは誰も殆ど経験が無いと思う。

発言者⑧：発言者⑤さんから提案のあったシティギャラリーについて、です。組織の中には埋もれている意見が沢山ある。それを掘り起こして意見を活用することが大切だと思う。声の大きい人だけの声を拾うのも多数決も良くないと思っていて、伝統や歴史も大事だが、それだけに囚われない様々な声を拾うことが重要だと思う。

発言者⑥：様々な仲間の声を聞くと、それが仕事や様々な取り組みのヒントになる。こう言った新しいことをやる時には5歳児の気持ちになることも重要だと思う。様々な声を拾い上げる「市民に一番近いシティホール」であって欲しいと思う。

発言者⑦：組織の中に入って埋もれてしまう声についてはあると思うが、発言者⑤先生の話にあったようにサロンやホールがあって、そこで市民と職員や議員さんたちが交流しながら新しい何かを見つけてゆくようなことも出来れば面白いと思う。

発言者④：小さな声を拾い上げるのは大切なことだと思うし、また、殆どの方が何も知らないという状況についても何とかできないかと思う。市を動かしたり、予算を取ることもなかなか難しいが、市民がまとまって動く行政も動きやすいようだ。市民が参加してまとまるのが重要で、そのような場をつくったほうが良いと思う。また、仙台にスポーツミュージアムをつくろうという声もある。最近の仙台は世界的なアスリートを輩出している。そういう盛り上がりに対応した整備も必要だと思う。

発言者⑨：「声」は音声でもあるが、こどもは三次元で形をつくらせた方がうまくやる。特に子供に対しては、言葉や絵や模型など、多様な表現を受容するような試みがあっても良いと思う。

発言者⑤：模型やパネルと映像で賑わうまちづくりセンターは魅力的な仙台らしいコンテンツになると思う。そういった場をつくるために多少のお金をかけても良いと思う。

発言者①：街に対しての市民の声を獲得する場として、共通のツールとしてそういったものが必要なのではないかという事だと思う。

発言者②：前に市役所をつくるワークショップに参加した時に、高校生が「インスタ映えする市役所」という話があったのを面白いと感じた。

<休憩>

発言者③：仙台市庁舎の建て替えが発表された時に市に宮城自治研究所から要望した二番目の要望書をお配りしました。

発言者①：後半は、前半で議論してもらったものを元に議論したいが、前半の議論をキーワードとしてまとめると「仙台のまちを市民でつくってゆく、基地的存在」だと思う。サロンというより基地で、ひとつではなくても幾つか分散していても良いと思う。また、主体についても

重要で「市民」という言葉が出て来ていたが、職員にはオフィスがあり、議員には議場があるが市民に居場所が無いことが課題だということも共有しているのかなと思う。

発言者⑧：仕組みやソフト的なことは重要だが、ハード的なことについても重要だと思う。今では民間の力を活用することは普通になっているが、果たしてそういうことは検討されてきているのかと思う。公共サービスは税金でやるべきだという建前がある一方でそれではやり切れなくなっている現実もある。

発言者①：「公共サービスは行政職員だけでやる時代ではない」という事に象徴される様々な取り組みがあっただけでしかるべきだということですね。

発言者④：登壇者の方の資料の中に「コンペの審査員は勝手に決めるな」とあるが、その通りだと思う。今日の会議についても、これをやるだけでなく、この後どう現実に繋がったかというところまでオープンにして欲しい。

発言者⑦：市民の声を中心に考えてきたが「職員さんたちはどう思っているのか」については、まったく分かっていない。それも知りたい。

会場 1: 3年前まで市の職員だったので代弁して答えようと思う。本庁舎はヘッドクォーターなので、市民と接するというよりは業界や団体等との接点が多い。新しいシティホールは市民と市が対等であるようなイメージだと思うが、それには、市民との接点を多くすることが非常に重要だと思う。物理的にも障壁（間仕切り壁）を少なくし、課を超えて総合行政が成立するような空間づくりをした方が良くと思う。市民がずかずかと土足で中に入って行けるような空間の方が良いのだと思う。発言者⑤先生からも話があったが、低層階の部分について市民が行き易く自然に行政との接点が出来るとなつくりが良いと思う。

発言者⑤：オフィスゾーンに市民が来ると、何人かに1人はクレーマーのような人がいると思う、そう考えると、市民がオフィスに入ってゆくよりも、行政職員が低層部に入ったほうが良いのか？

会場 1：あまりそういうことはないと思う。逆に行政職員の数が多い方がなだめやすい場合もあると思う。

発言者⑨：利府の庁舎がそのような考えでつくられていると思う。オープンな庁舎で様々な方が関われる空間が良いと思う。

発言者①：空間的な開放性の話があったが、「仕組みとしての開放性」についてはどうか？

発言者⑨：この10年間のうちに、市役所職員がワークショップのファシリテーターをやったりという事が増えている。市役所職員の在り方もどんどん変わってきていると思う。

発言者①：市民と職員の垣根がどんどんなくなっているという話だと思いました。実際そうなんですか？先ほど縦割りという話があったが職員同士の垣根はどうでしょうか？

発言者⑩：「一緒に町を豊かにしよう」と言うような話はみんな同じだが、例えば公園管理を例にとると、ルールだけに則って運営する方が職員にとっては楽なので、どうしてもそのようになりがち。面白いのは、職員のとる態度が立場に縛られること。本当はそこを乗り越えなければならない。スパイクタイヤの市民運動は仙台発祥のものであり、そういった機運があることは強いと思う。

発言者⑧：市民と空間について、八戸のブックセンターに行ってきたが、八戸市民作家の部屋というのがあり、登録すると、プロでなくても様々なものが使えて、そこから市民作家が生まれ

たらしい。

発言者⑥：市民と職員はまだ近いように思うが、市民と議員はもっと遠い。一度議会を聞きに行ったが本当に遠く感じた。市役所がシティホールになるのであれば、議員さんと市民が対話できるのであれば良い。

会場 2：市議会議員をしている。地区から選出されているのでそこから話を聞いているつもりではいるが、なかなか限られているので、それ以外の方の意見を聞いてゆく機会も重要だと思う。例えばこういう場が議会にあり、ガラス張りで様々な意見が交わされるのも良いと思う。一議員の意見としてはだが。

発言者⑤：議会にお願いだが、新しい議会のどうするかは特別委員会などで考えていると思うが、そうした内容を HP などで公開して欲しい。そこで市民に問いかけて、そこで吸い上げた意見をまた特別委員会に問いかけるなど、そういう取り組みをして欲しい。統一された意見でなく、会派ごとのナマの意見でも良いので、お願いしたい。

会場 2：議会の中でもその委員会に出なければ内容は良く分からない。こういう場でオープンに議論することはすごく重要だと思う。

発言者④：国会をまねた議会はつくって欲しくない。もう少し市民と対等な議会であって欲しい。

発言者③：議会について、執行部と議会とのやり取りも重要だが、提案を議員同士で高めるような場が自分の町にはない。それが出来るような場であって欲しい。

発言者②：職員だけど市民活動していたり議員だけど市民活動をしている人も居て、プライベートで会うといろいろとフラットに相談できるが、同じ方と公式な場で会うと急に他所他所しく役所対応になったりする。

発言者①：「行政だけでは公共サービスを担いきれない時代の中でシティホールはどうあるべきか」という論点で話をしてみたい。

発言者④：仙台は支店経済だが、支社のデータを集める基地があっても良いのではないかと思う。東京本社のバックアップ機能があれば良いと思う。

発言者⑧：今後の人口の問題やオリンピック後問題を考えると、現時点での MAX の状況で（人員や面積を想定して）つくるのはマズいと思う。逆に規模をもっと小さく想定したほうが良いのではないか。集約だけでなく、分散することも重要だと思う。公共建築は予算がつけば予算を消化しきって、維持費が無なくなっているのが現状である。将来をきちんと見据えて計画すべきだと思う。

発言者⑥：「市役所に市民が稼げる場をつくること」は大切だと思う。マルシェのようなものだったりと、富谷市でやっている取組みが面白いと思った。

発言者①：「行政だけでは公共サービスを担いきれないこと」が民間の仕事になっていたり、「市役所に市民が稼げる場をつくること」もあると思う。最後に一言ずついただいて閉めます。

発言者⑨：いろいろなアイデアがあり、触発されて皆さんとつながった気がする。

発言者⑧：市民も勉強したりする人はもっと行政に参加してゆけば良いと思う。資本力がなくても能力のある人が行政にコミットして行くことにより、すごく市民力が上がると思う。そういったことを実現したい。

発言者⑤：街中に賑わいをつくると言っても、消費する人が集まる商業イベントのようなものではなく、いろいろな想いをもって集まれる場作りが大切だと思う。それが市民活動にも繋がる、

古代ギリシャの「アゴラ」のような場としてこれが出来れば良いと思う。

発言者④：エン（縁）ターネットという言葉が好きで、使っている。縦割りでなく横割りの行政になってゆけば良いと思う。

発言者③：建築が短寿命過ぎないか。もっと長く使えるものにならないかと思う。（街中への）分散型の配置も悪くないと思うので、そういった検討もしたほうが良いと思う。

発言者②：市民市役所職員議員が議論できる場所になれば良いと思う。「そっだ市役所に行こう」と思えるようなものになると良いと思う。

発言者⑥：全国から「仙台市のようなことをやると良い」と言われるロールモデルになるようなものになればよい。開かれた市役所であって欲しいので、こういう場をもっと続けて欲しい。

発言者⑦：様々な考えがあり、それが分かってよかった。仙台市を考えた時に様々なアイデアがあり、ワクワクする未来があると思えたのが良かった。

発言者①：何となくぼんやりとみなさんの共通の理解が見えてきた気がする。「責任ある市民」という言葉があり、私たちも「責任ある市民」として自覚して取り組まなければならないと思った。

以上

第1回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル©【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える。速報メモ

■登壇者・担当者

企画担当 : 高橋直子
 ファシリテーター : 坂口大洋
 ファシリ補佐 : 宮城県建築士会 高橋直子・小林淑子 撮影 : 岡本宇京・麓結

登壇者

石塚直樹 一社) みやぎ連携復興センター
 山田文雄 (株)都市デザイン 顧問 (仙台担当)
 本郷紘一 せんだいディベロップメントコミッション(株)
 大澤隆夫 音楽の力による復興センター・東北 代表理事
 平岡善浩 宮城大学事業構想学群 教授
 武山祐樹 仙台青年会議所 2019 年度理事長予定者
 武田 均 仙台市スポーツ振興事業団常務理事
 清本多恵子 宮城県建築士会
 高橋清秋 宮城県建築士事務所協会
 (後半のみ) 伊藤清市 NPO 仙台バリアフリースポーツセンター理事長

1. テーブルの主旨と自己紹介と各自の活動から見える様々な意見

発言者①・発言者②・市役所の建て替えにおいて市役所の計画と同時に、広場の在り方は重要な意味を持つ。このテーブルでは、広場や屋外空間のイベントや日常的な使い方を一つの視点として持っています。もう一つは、文化や観光の側面で考えると仙台以外からの市庁舎の在り方、いわゆる広域的な視点からの議論を考えています。

発言者③・これまで行ったスポーツイベントで広場を使用した例は、仙台ハーフマラソンのトークショー、女子駅伝のゴール、スケートリンクの設営など。羽生選手のパレードは、警察から使用を止められた（人数の把握ができず、混乱を予想される、との理由）

- ・スポーツイベントとしては、市民広場は重要な意味を持つ。ただ雨天の際への対応は課題となっている。

- ・集まってくれた人々を、仙台でどうもてなすか、それらを経済的な活性化にどのように結びつけるかが重要な目標となっている。

発言者④・仙台中心部において複数の会場で行っている音楽イベントのせんくらの活動をやっている。

- ・震災の1週間後から、被災三県に音楽を送る活動を1000回以上行う。

発言者⑤・仙台を日本一美しい街にしたい、という思いで活動。

- ・「1杯のコーヒーが人を豊かにする。」活動を、定禅寺通りで行っている。

- ・2016年のコーヒーフェスでは、180店舗、2日間で1200万円の売り上げ。

- ・ローカルでお金が回って潤うことを一つ目標としている。

- ・県産材を使って仙台屋台を作成し、社会実験を仙台市と行っている。2019年1月まで。
- 発言者⑥・仙台市職員時代は都市計画でまちづくりを行っていた。反省も多々あり。
歴史的な経緯を示すと市民広場はかつてこの形ではなかった。
- ・長町で広場をつくる時、地域の人に「広場を一部の専用使用権？」を考えたが実現していない。運営を主体的にできる仕掛けづくりが重要。
- 発言者①・広場をどうつくるかだけではなく、それらの運営組織や公民連携なども重要な課題になるということですね。
- 発言者⑦・環境と人間をデザインでつなぐ取り組みをしている。
 - ・アートイベントに関わった地域は、越後妻有・東鳴子など。
 - ・現在、仙台市は商業的には仙台駅周辺に人が集まっており、市役所周辺は今後？
 - ・定禅寺通りのイベントと人の動きは幾つかのタイプがあると思われる。
- 発言者⑧・2012年から仙台におり、震災復興に携わっている。色々なネットワークをつなぐ方法があり、各種のセクターをつないでいけるのでは。みやぎボイスなどの復興のプロセスでは、みんなで課題を共有する取り組みなどを行っている。
 - ・災害時において、これからの市庁舎がどのような役割を担うかが重要なポイント。
 - ・長岡市役所などがいい例。
 - ・ここに行けば非日常利用も含め、すべてがわかる窓口機能をどのようにつくれるか。
- 発言者⑨・すずめ踊りをやっている。昔は仙台祭といった。
 - ・政宗公にもっと焦点をあてた街づくりは？
- 発言者⑩・事務所協会では、建築系学校の設計コンペなどを行っている。震災復興も含め。
 - ・JAZZ フェスでゴミ拾い活動など。
- 発言者⑪・青年会議所では、七夕花火祭、青葉まつり、3.11 キャンドルナイト、
 - ・防災面の取り組みとして、神戸・熊本の学生さんと啓発の会を行う。
 - ・インバウンドが東北は日本の中でも遅れている。海外の人が何を求めているか、何が街のシンボルになり得るか、を考えたい。

2. ジャンル別に現状と課題を具体的に掘り下げる

- 発言者③・イベントの運営コストを下げたい。
 - ・市民の合意形成をどうつくるか。例えば、広場の占有利用とか道路を止めてもいいか？
- 発言者①・運営コストを下げるためにどのようなインフラをつくるべきか、もう一つは市民合意形成をつくるために、蓄積も重要ということですね。
- 発言者④・震災イベントでの話。音楽ホールなどが使われていない時どう使うか、市街地の活性化になり得るか。震災後にこういう場所が望まれていることを認識した。
 - ・広場としての音楽ホール、というアンケートをとったら、1260名からのコメントがあり、「音楽を超える音楽ホール」を目指している。音楽ホールを作るという事は、「新しい広場をつくる」ことである。
- 発言者⑤・市民広場には電気、給排水のインフラがない。
- 発言者⑥・長町広場では、インフラの整備を検討したいが、諸問題（ランニングコストなど）があり、実現できなかった。

- ・通常の「公園」の管理を超えて、「広場」を主体的に運営する考え方が必要。「公園」となると、すでにある規則に縛られてしまうため、何もできない。
- ・広場と市役所側の空間を、どのように接続するかを考える必要あり。

発言者①・試しにやる、という社会実験が必要なのは。トライ&エラーから見えてくるものあり。

発言者⑦・広場のインフラを市役所と一緒に考えることはできないか。

- ・面的、広域的にとらえ、メディアテーク、定禅寺通りとともに考えていきたい。

発言者①・メディアテークは3000~4000人/日の来館者がある。そういうことから、周辺にカフェができる、試しに店を出す、というは波及効果がでてくる。そのような空間となるべき。

発言者⑦・メディアテーク周辺は、若干家賃が安いので、トライしやすい。

発言者⑩・観光の面で、外から人を呼ぶための場所はどこか。行政とは違う立場で、インバウンドに求めることはどこか。東北に来る外国人のほとんどは、仙台が軸になっている。

- ・現在、外国人には仙台のサブカル（文化横丁、定禅寺周辺、カフェ、居酒屋など）を紹介している。市役所周辺も、有効なスペースになり得るようにならないか。

発言者①・仙台空港からのアクセスを考え、ワンストップ機能をどこに、どう持たせるか。

発言者⑩・台湾の事例では、1か所にすべての地域の情報が集まり、体験もできる場所がある。

発言者⑨・祭のもつ歴史的背景を踏まえれば、定禅寺通りで踊ることは特別。皆さんもぜひ！

- ・青葉山公園整備における観光センターとの連携も必要では。

発言者⑨・仙台の子供はずめ踊りを踊れる、という共通体験がもっと広まってほしい。学校と家、地位との繋がりがもっと持てる可能性がある。

発言者②・徳島と仙台市は姉妹都市であり、阿波踊りでつながっている。現在も、事務所協会におどりのつながりがある。

発言者⑧・広場を災害時に生かせるか。それぞれの活動は素晴らしいが、広場を広げればそれでいい、というものではないはず。質を高める方向で、しかも広く、ということか。

- ・災害時に使える、ということは、日常的に使っているということ。市役所との協働。
- ・広場を運営するには、広場だけにとどまらず、公民連携のしくみが必要。

・・・休憩・・・

発言者⑫・NPO 法人仙台バリアフリーツアースンター理事長。市役所建替企画検討委員会委員。今回の会議には、障害者団体のメンバーがいらっしやらないため、急遽、入っていただいた。

- ・とっておきの音楽祭を主宰している。2001年から続いており、現在は日本の18か所において行われるようになった。参加団体は300~320グループ。2500人が参加。13万人が訪れるイベントである。6月第1日曜日に行われている。
- ・開催の場所は若干の制約があり、トイレが近い、車いすが入れる、などの条件がある。

発言者①・イベントは参加した人しかわからない、ということがある。個々の活動がわかる仕組みが欲しい。広場を超える主体が必要か。新しいアイデアも生まれる。

- ・リピーターを継続させていく仕組み。

発言者④・大震災の10日後にコンサートをやった。今は、仙台の取り組みが、全国の例になっている。

- ・アーティストと仮設集会所をつなぐ、広場とイベントをつなぐ、というマッチングなど

も行う、中間支援組織ができないか。協議会でもいい。

発言者⑦・民間がやれるのか？

- ・市営公園マネジメント方針がある。たとえば、デモを行う場合、そこでできるか？という例にも対応できるように。

発言者③・楽天のパレードはやりやすい。荒川・羽生選手の場合は大変だった。運営母体がちゃんとしているかいらないか、はとても大切。広場の運営も、母体がちゃんとしないと難しい。

発言者⑨・イベントとの事例ではなく、運営の事例として。鶴ヶ谷団地は高齢化しているため、どんと祭に行けない、という状況であった。近年、公園でどんと祭ができるようになり、喜ばれているが、管理・運営は町内会が行っている。

- ・青葉祭は観光コンベンション協会が主催している大変大きなイベントであるが、市民参加が多いか、といえはまだまだである。

発言者①・大曲の花火大会は協議会で運営しており、すでに100年間続いている。市民よりも多くの方が押し寄せるイベントであるが、いわゆる祭りが街を鍛えるいい例である。

発言者⑧・イベントによって、その都度実行委員会を作る、参加する人がやりたいようにやる、ということがいいのだと思う。その活動を誘発するような仕組み作りが必要ではないか。

- ・情報発信、情報機能が大切である。

発言者②・震災後に応急危険度判定を行わなくては、ということで震災翌日に県庁に行った際、大勢の市民が県庁に押し寄せていた。災害時には市民、県民は行政に頼る、ということを実感した。災害時の広場はどうあるべきか、は大変重要。

発言者④・音楽ホールと市庁舎との連携を是非、はかりたい。

発言者⑤・小さな主体がコンテンツを通し、チームを使って大きな主体となる方法。

- ・公民連携のプロジェクトが必須。本当の公民連携ができればと希望。
- ・仙台は「ローカルファースト」の人が多い。毎日、日本で一番過ごしやすい街を目指したい。例えば、ポートランドの広場には、名前入りのレンガが敷き詰められている。何万人もの人が広場を作るために寄付をして、その人の名前が書かれている。
- ・やりたい、と思っている人はいっぱいいる。

発言者⑥・イベントの運営主体と、広場の運営主体は違う。広場+市庁舎の運営主体が同一であればいいのでは。

- ・場の運営がうまくいけば、イベントの発掘などもでき、これまでのイベントもますますうまくいくのではないか。

発言者①・広場と市庁舎の間には境界線がひかれるが、例えば、メディアテークの定禅寺通り側に面した大開口のように、メディアテークの運営主体と定禅寺通りのイベントの運営主体は違うけれど緩やかにうまくいっている、というイメージでは。

- ・課題の提示が様々にあった。
- ・広場と広場をつなぐ、また、広場の主体についての可能性などが感じられた。

第1回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル⑩【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える。速報メモ

■登壇者・担当者

企画担当 : 手島浩之
 ファシリテーター : 手島浩之
 ファシリ補佐 : JIA 佐伯裕武・阿部元希・吉田和人 撮影 : 早坂陽

登壇者

遠州尋美	元大阪経済大学教授
鈴木伸治	横浜市立大学都市社会文化研究科
姥浦道生	東北大学工学部建築・社会環境工学科
高森義憲	札幌市まちづくり政策局 都心まちづくり推進室室長
紅邑晶子	一般社団法人SDGsとうほく代表理事
佐藤勝幸	パシフィックコンサルタンツ株式会社 東北支社,社会イノベーション事業部地域戦略室
末 祐介	中央復建コンサルタンツ
桂 有生	横浜市役所 都市デザイン室
宮本 愛	つながりデザインセンター理事

発言者①：他都市からの視点を元に「仙台らしさ」や「都市の個性」について皆さんから意見を伺いたい。

発言者②：横浜は新市庁舎を別敷地に建設中である。横浜は、関東大震災や空襲で壊滅的な打撃を受けたまち。「場所性」を考えた整備が重要だと思う。基本的なまちづくりの方向性は、「関内と横浜駅周辺に二つの都心が出来たが、それをひとつにする」こと。もうひとつの戦略は「水辺を市民に開放する」こと。新市庁舎のコンセプトは「関内とみなとみらいをどうつなぐかと「水辺をどう作るか」ということ。都市デザイン室が中心となって「歩行者空間の再生」などに取り組んでいる。また古い建物を残すことにも重点を置いている。文化芸術と都市計画をオーバーラップさせることを目指し、「創造都市横浜」という目標が掲げられて取り組んでいる。「新庁舎がまちにどういったインパクトを与えるか」については、①大量の空きオフィス空間が出来ること、②人の流れが変わること（関内地区の最大の産業は県庁市役所である）、③水辺のポテンシャルの上昇。現在のオフィスの空室率は2.9%と低いが、新庁舎完成後は12.27%となる。

発言者③：横浜らしさを考えると160年前の「開港」に始まると思う。そこから横浜の個性が始まったと考えている。横浜市は60年代から「都市デザイン」という手法に取り組んでいる。「歴史を大事にする」と「新しくつくる・きちんとつくる」の両方を大事にしている。「都市の主演は車でなく人間である」という事を大切にしている。新市庁舎の基本計画の5つの基本方針について、「横浜らしさ」という視点が抜けていたので危機感を持ち、「コンセプトブック」をつくった。この整備計画では、「基本設計を含んだデザインビルド」という手法が取

られているため、(受注業者にも向けて)「都市デザインの視点から新市庁舎に求める空間の質」を表現することを意図している。市民ワークショップも行ったが、基本設計がまとまってから行った。基本計画の前からこのように盛り上がっている仙台が羨ましいと思う。これからうまく取り組めばまだまだ間に合うと思う。横浜の場合、「都市らしさ」は、震災や戦災で痕跡は残っていないが、残されたものの中で都市デザインに活かそうとしている。新しい町をつくるに際しても、歴史をベースに踏まえて次の提案をすることを考えている。

発言者②: 都市や都市の個性は人の記憶の集合だと思っている。それが戦災で無くなったとしても、記憶から失われている訳ではない。そういう意味で歴史は重要。文化財でもない限り長期的にはまちは変わってゆくものだと思う。その上で良い循環をつくれるかどうかが良い個性をつくれるかどうかだと思う。

発言者④: 札幌の都心部の多くのビルが札幌オリンピックで建てられたものが多い。2020~2030が建物の更新のピークになると考えている。「第二次都心まちづくり計画」と「新エネルギーマスタープラン」を策定し、一体的に取り組んでいる。都心部を4つのエリアに分けてエリアマネジメント活動を行っている。2005年にチカホで、地下と地上を一体的に整備し始めた。H23年にチカホが全面オープンした。新庁舎建て替えについてはもうすぐ議論を始めようと考えている。他都市とは違い「都心まちづくり推進室」が場所や機能などの検討を進めることになっている。「都市らしさ」について、北海道は明治の開拓期以降、新しさに対するチャレンジを続けてきたと思う。その姿勢が札幌らしさだと思う。また、都市と自然の近接性も札幌の特長だと思う。

発言者⑤: 「都市らしさ」は一番訴求力の高い長所で表現されるのだと思う。「仙台らしさ」についてはすぐにピンとくるものは無いが、若いころの仙台と比較して、自ら「仙台らしさ」を放逐してしまっていると思う。「杜の都」とは、大年寺山から八木山、青葉山、北山に至る丘陵に抱かれ、広瀬川の河岸段丘に築かれた市街地を占める旧武家屋敷の屋敷林が基盤になっていると思うが、1960年代以降失われてしまったと思う。都市の個性とは「そこに住んでいる人が自覚し覚悟して貫くかどうか」だと思う。フライブルグというドイツのまちは繊細で80%が瓦礫となったが、皆で議論し中世の街を復活させることにした。「中世の街並みを守る」という大きなビジョンがあり、その下で、都心から車を締め出すこと決定し、トラムによる公共交通体系などを実現している。フライブルグ市を中心に東西70km・南北60kmの全ての公共交通機関が1枚の定期券でシームレスに繋がる交通システムをつくり上げている。「中世の街を守っていく」というコンセプトを元に様々な仕組みをつくり上げており、それが個性を創り出している。

発言者⑥: 「その都市らしさ」は確実にあると思うが、それをハードに反映させるためにどう表現するかが難しいと思う。仙台の良さの一番はバランスの良さだと思う。何でも手軽に手に入るし、それが手軽に手に入る。定禅寺通も他にはなかなかない誇りだと思う。ソフト的には、マラソン大会やジャズフェス、青葉祭りなど市民参加のイベントが非常に多いのが特徴だと思う。結論としては、「そこに住む人が自覚し覚悟してまちづくりの場面に貫くかどうか」についてはまさにその通りだと思う。仙台には様々な個性があると思うが、この市庁舎建て替えだけでなく、駅前や様々な場面で積み上げてゆくことが個性に繋がると思う。

発言者①: このシンポジウムのもう一つのテーマが「地域の専門家が、業務受託以外でどう地域の

専門的分野に貢献してゆくか」だと考えている。「専門的見地から見るとこの計画は良くない」と分かっている、他人の仕事にケチをつけるような形になるのを嫌い、誰もが口をつぐんでしまう。それが、ダメな計画がそのまま出来てしまう大きな原因の一つになっており、より良い地域社会をつくってゆくためには、様々な専門家が責任をもってオープンに批評し、計画を良い方向に導く場をつくるが必要不可欠だと思っている。次の方々はそれぞれにそういったことを踏まえてお話しいただきたいと思う。

発言者⑦：これまで市民活動の支援を長く続けてきた。サンフランシスコの庁舎に行ったとき、市役所ツアーがあり、結婚式を挙げたり、市民も使える場所だったのに驚いた。また、議会が夜に開催され、市民も自由に傍聴できるようになっていた。よく「市民のために開かれた」というが、今日のような場で多様な人たちが話し合うことから生まれるのだと思う。シンボリックな市役所にして欲しいと思う。「市民が自慢できる市役所」が重要だと思う。市民が使い倒すことのできる市役所であることも重要。また、仙台市役所は単に仙台市民だけのものではなく、東北での役割だとか、震災を経て被災地の中心としての役割も担っていると思う。

発言者⑧：そもそも庁舎に「らしさ」が必要かは疑問に思っている。庁舎そのものの形よりは、庁舎に至るまでの空間や経路（アプローチ）が非常に重要で、そこに個性が現れると思う。他都市では、道路脇に突然庁舎がある例も多い。そうすると、建物で「らしさ」を演出しても「らしさ」を感じない。「らしさの演出」もあるが、ひとつの仕掛けや演出で「らしさ」が出来ことはない。単に「らしい」だけでは、逆によくない。使われてゆく中で「らしさ」が出来て来るような「奥の深さ」が良いと思う。「作り込み過ぎない」ことで、その都市らしい使われ方が現れ、それが「らしさ」に繋がっていくことが重要だと思う。長い目で見て振り返ると、この「ラウンドテーブル」のような議論を積み重ねること自体が仙台らしさだと振り返られる時が来るのではないかと思う。「らしさ」を誰が感じられるかを考えた時に「市民が誇りをもって思うことが重要」。

発言者①：話を聞いて、「らしさ」が難しいのは、これが、定量化することが出来ない「質の問題」をはらんでいることだと感じた。また人によって感じ方も違う。或は、専門家からすると設計図を見ただけで良し悪しが分かるが、それがなかなか市民の人たちには分かり辛いし伝え辛いという問題もはらんでいる。それをどう専門家と市民で共有しオープンに議論してゆくかも問題だと思う。

発言者⑨：外から転入してきて4年になるが住み易さが気に入っており、住み続けたいと思っている。外から見て分かる「らしさ（ケヤキ並木や伊達政宗）」と住んで感じる「らしさ」は違うと思う。個人的に一番気に入っているのは「都市の規模」である。15分で知り合いに会いに行けるのは東京ではない体験。人と人との関係も近い。知り合いの知り合いを辿るとすぐに適切な人に合うことが出来、様々なイベントや思い付いたことが実現したりする。一方で、政令指定都市なりの規模があり、仙台市役所本庁舎にはあまり縁が無かった。逆に言うと、そういう「ハレの場」としての市役所であっても良いと思う。市役所が「らしさ」を持つべきかについては、「市民が大切にしていること」が表現されていることが重要。

発言者⑩：最初に思うのは、仙台らしさを表現した建築物を作ろうとしない、ということ。建築家が作品を解説する時に「ここの部分で、このまちらしさを象徴した」と言っていることがあるが、「らしさ」は多様なもので構成されているので、一つの建築物で表すことはできない

と思う。この新しい市庁舎が「仙台らしさを構成する一部になるという能動的な意思を持つ」ことが重要。この市庁舎が新しく生まれ変わって、使われだして、「仙台ってシティホールをこういうふうに作り、こう使っているんだ」となることで、古くて新しい仙台らしさが立ち現れると思う。二つめは、建築物を作るときに考えるときには、その場所の特性を上手く活かそうという姿勢が重要。それが上手くいった建築物は、その地域らしさを獲得できる。逆にそれが失敗している建築物は、地域から浮いてしまう。新しい市庁舎の場所の特性というと、「市民広場と隣接していること」と「定禅寺通と近接していること」である。この2つの「場所の特性」を活かすことができれば、「仙台らしい」市庁舎が立ち現れる。市民広場はもともと、毎週のように活用されている日本でも珍しい都市の広場だと思う。定禅寺通にも民間による場所の使いこなしが生まれつつある。市庁舎が新しく生まれ変わることをきっかけに、これらの動きが、さらに広がるように、使う人の声を最初の段階から織り込むためのプロセスがあると良いと思う。

発言者⑤：新市庁舎の計画に「都市のビジョンが見えない」という指摘が様々なテーブルであったと思う。一方で横浜市の事例紹介では「持続可能な国際都市」というビジョンが示されていたと思う。何をもち「国際都市」と言っているのかを知りたい。

発言者③：横浜は本当に国際都市なのかという疑問もあるが、何となくのイメージとしてあるのだと思う。なかなか難しいのは、横浜でも仙台でも、ヨーロッパのように「誰もが自然に従う規範がまちに刻まれている」という事が無いこと。今それで悩んでいるのであれば、50年後も同じことで悩むのは不毛だと考え、新しくつくるのであれば、その解決に向けてゆくって行きたいと考えている。横浜は50年都市デザインに取り組んできた過去があるので、「市民みんなが覚悟してまちづくりに取り組む」ことに近づけたいと思っている。

発言者①：日本には「まちづくりや景観に際して市民全員の合意の上に成り立った規範が無い」という指摘について、重要な指摘だと思う。

発言者②：横浜もそんなに良い規範があるわけではない。そんな中で「こうありたい」というメッセージをどう発するかが重要。現在の仙台市庁舎をぐるっと見て、「市民に開こう」という態度が見られないと思う。「開かれたメッセージ」として、行政と市民の関係をきちんと表現することが重要だと思う。周囲の街に開き、繋がってゆこうとすることが重要だと思う。基本構想を見て「周囲の街のどの軸とどうつながってゆくべきか」という大きなコンセプトをもっと伝えた方が良いと思った。

発言者⑧：岩手県八幡平市での新市庁舎での取り組みについて紹介したい。3町で合併しそれをつなぐ鉄道を中心に既存の駅を移設してまで、鉄道を中心にした新庁舎と文化ホールをつくりまちづくりを行った。そこには町長の「3町は鉄道を軸にしてひとつになる」という明解なビジョンがあったと思う。仙台も庁舎をつくることで「何をメッセージとして発するか」が大切。それが市民の精神性と一緒になって「らしさ」に繋がると思う。

発言者④：仙台市役所廻りを歩いてみると、札幌と比較すると「緑の量」が多くて驚いた。また本庁舎と県庁、市民広場、勾当台公園の交差点が象徴的で素晴らしいと感じた。様々な諸事情を知らない前提で言うと、基本構想を読んだが、そこを活かす計画が無いことに単純にがっかりし、空間価値を下げってしまうのではないかと危惧している。今年の9月6日に北海道はブラックアウトを経験したが、2万人の観光客がホテルを追い出され、(県庁でも区役所でも

なく) みんなが市役所本庁舎を頼りに集まって来た。その際に市役所の象徴性について、感じるものがあつた。建物自体でなく、場所や空間とセットで考えることが重要だと思う。

発言者⑦: サンフランシスコでも、市役所の近くに文化ホールなどの文化施設などの特徴的な機能が集積していると感じた。勾当台公園周辺もそうだと思う。市役所・県庁・県警とつながり、象徴的な場所になっている。そういった集積した都市機能をどう市民として活用できるのか、という視点が必要だと思う。そう考えると、今までの市役所本庁舎とは違う空間になることが求められているのだと思う。在るものは活かしてないものを加えてゆくことが必要。歴史や文化に加え、震災で経験した様々なことを新しく加えてゆくことが重要だと思う。また、この計画を点でなく面でとらえて考えることが必要だと感じた。

発言者⑥: 「新しい仙台らしさ」をつくるのは難しいと思う。そもそも「何を目指すのか」を新しく市民で共有するのは難しい。なので、基本構想検討委員会の際には「今あるものを育てる」ことを考えた。ハードとしては定禅寺通や市民広場であり、ソフト的にはそこで行われる様々なイベントだと思う。例えばこう言う議論が行われる空間が市役所にあり、それが市民広場と一体となっているという事でも良いが基本構想段階ではなかなか具体的な話をし辛いという側面がある。基本構想検討委員会の中では広域な資料もあつたが、外には出ていないだけなので、それについても付け加えておきたい。桂さんに聞きたいが「デザインコンセプトブック」をつくって、良かった点と悪かった点を端的にお聞きしたい。また、佐藤さんの指摘「ハードをつくり込み過ぎないことの重要性」については同感。

発言者③: デザインコンセプトブックの良かった点・反省点について、質の話が出来たことは良かったと思う。「つくり込み過ぎない」ことについては、やはり配慮している。横浜ではデザインビルドでの発注となったが、その要求水準書などでは「(天井高さや面積などの)量」の話しかできず、「質」の話を問えない。それらを組み合わせた時に何が生み出されるべきなのかといった話がほとんどできていない。20か所に分散している庁舎を一体にした時に何が起こるのか、についてもほとんど議論されていない。デザインコンセプトブックは、デザインビルド選定委員会の資料のひとつという位置づけなので、あまり正式な位置付けが無いとも言えるし「こうありたい」という思いを含めて自由に書けるものでもあつた。横浜市はJIA 神奈川と包括連携協定のようなものを結んでいて、そこでいろいろと相談し「デザインコンセプトブック」にも反映させた。課題としては、「デザイン」という言葉が市の中でも表層的に捉えられていると感じた。また、「デザインコンセプトブック」は議会を経っていないので、のちに、「誰がこれを決めたのか」など、内容についての正当性が問われることになったことが反省点だと思う。

発言者①: 震災復興の現場で強く感じたが、「手続きの正当性」については、やはり問われることだと思う。今の制度の中では「市民の声」がなかなか「手続きの正当性」を持ってないので、今日のこの場が、地域の声が「手続きの正当性」を確保できる第一歩になれば良いと思っている。

発言者⑤: メッセージ性が大切。あとで「何がやりたかったか」が明確でないと駄目。例えばあすと長町を見ても何がやりたかったのか分からない結果になっていると思う。杜の都と同時に「広瀬川」も重要だと思うが、どう活かすかについて今まで議論されていないと思う。一番重要なのはパブリックアクセスだと思う。人々がコストを掛けずに様々な都市資産にアクセ

スできるかが重要。また、仙台では世界的なアスリートが沢山育っているのでも考えてみたい。

発言者②：「規範が無い」ことについて、逆に言うと、都市のつくり方について、区画整理にしても駐車場ばかりの現庁舎にしても、その時代では最先端の一番良い制度やつくりだったはずだが、時代によって求められるものが確実に変わってきている。この市役所のあり方がこれからの仙台のまちづくりの規範となり方向性を示すものであるべきだと思う。公園のあり方もものすごいスピードで変わってきているので、そういったことを取り入れるとか。「ここでこうした議論の風景が横浜市役所にもできるといいなあ」と話したが、「いかに庁舎を開いてゆくか」が重要だと思う。

発言者⑩：「どのような場をつくりたいか」の提案が大切。ここから50年使っていく庁舎を、担当部署と受託業者だけで考えていくべきか、についても考える必要がある。かなり難しい問題なので、広く意見が言え反映できるプロセスデザインが必要。それも含めてのデザインだと思う。「具体的にみえてから初めて意見が言える」という事もあるので、「ここまで組み上げたのでもう意見は言えませんよ」ではなく、意見を受け止める仕組みをデザインして欲しい。先ほどの話ではないが「これって誰が決めたの？」と問われた時にきちんと位置付けがあるようなプロセスデザインが重要。

会場1：女川のまちづくりに関わっているコンサルタントをしています。今日の話の中では、つくるところまでの議論が多いが、「どう使っていくか」についての市民からの意見が必要だと思う。仙台市の総合計画を2年かけて作る良いタイミングと重なっているのでも、総合計画を考えながら施設やエリアづくりに反映させていくことが重要だと思う。震災があり、今、女川ではそういったことをしている。使われ方を見ると、市民広場は単に仙台ではなく、東北を発信する場としてつくるべきだと思う。

発言者⑨：抽象的な意見になるが、アメリカで中高を過ごした経験からして「シティホール」は街の中心にありガイドブックにも載っており観光客が訪れる場所である。その時に「シティホール」という言葉のニュアンスとしては、行政というより議会であり「市民の代表が集まって議論する場所」という意味合いの方が大きいと思う。いわば「民主主義の象徴」としての建物だと思う。現在では、公共のあり方として、議会だけでなく様々な市民活動やNPOなどが関わっており、多様な主体が担って分け合っていく時代なので、そういったことが反映された現代的な民主主義のあり方を体現した象徴的な空間であるべきだと思う。

発言者③：都市空間と同じで、日本の民主主義はなかなか難しいと思う。デザインコンセプトブックをつくるときもその悩みに突き当たる場面が多くあった。空間の「使い方」や「どう運営するか」についても重要だが、日本ではなかなか難しい問題があるように思う、そんな中で、メディアテークという空間に育てられたこともあると思うが、このようにオープンに議論が出来る仙台というまちは、これがひとつの文化になるのではないかと感じる。こういう気風を加速するような市庁舎になれば良いのではないかと感じる。

発言者①：こう言った試みはメディアテークという素晴らしい都市空間に育てられたという側面もあるが、やはり何よりも震災復興での経験が大きいと思う。合意形成の力を強く経験した。良いデザインをしても、正しいことを言ってもなかなか通らない状況の中で、議論した合意形成の厚みが何よりも力になるという経験をし、そうして出来た手続きの正当性が最終的に

重要なのだと感じた。

発言者②：少し違う話だが、発注方式について、「デザインビルド」や「PFI」は良くないと思う。審査員をやることもあるが、数値に表れない話は評価の対象にならない。「より良いものをつくろう」ではなく、「より効率的に無駄のないものをつくろう」という事にしかない。今日の議論のように「市民に開かれた庁舎をつくろう」となった時に、「デザインビルド」や「PFI」では困ったことになってしまうと感じる。完成までの建設手法をどうするかも、重要なことなので、市民を巻き込んで決めた方が良いと思う。

発言者①：「発注の仕方を選択できる未来が変わってしまう」ということは、専門家でしか分からないことだと思う。そういったことについても専門家と市民で話し合えるようになりたいと思う。

発言者⑦：まちづくりに市民が関わっていく機会をもっと作る必要があると思う。今日のような場もすごく重要。議会にも委員会が出来たという話を聞くが、議会ももう少し風通しを良くして、議会と市民がつながるようにしてほしい。

発言者⑧：「らしさ」について、抽象的な考えだけではなかなか実現が難しいと思う。是非具体的な叩き台をつくって、それを元に議論を進めた方が良いと思う。

発言者⑥：庁舎は、オフィス部分と市民参画部分に分かれると思うが、オフィス部分についてはおよそ受託業者で考えるべき部分だと思う。肝心の市民参画部分については、「何をしたい」かや「どう使いたい」など利用者やどう活用するかなどの運営が見えてこないと考えられないと思う。それをベースにどういう空間をつくるかを考えるべき。なので、どう市民の意見を集めるかが重要。

以上

第1回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル⑥【まちづくりの視点から】 界限や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える。

速報メモ

■登壇者・担当者

企画担当	:	川口裕子
ファシリテーター	:	佐藤芳治
ファシリ補佐	:	宮事協 栗原將光 奥山和典 今野純子 撮影 : 佐藤正徳
登壇者		
増田聡		東北大学経済学部
小島博仁		(株)UR リンケージ
桃生和成		THE6 ディレクター
田辺いづみ		コピーライター
伊藤 強		珈琲 珈巢多夢
工藤浩由		一番町四丁目商店街振興組合専務理事
小林淑子		宮城県建築士会(まちづくり委員会)

発言者①：市役所と定禅寺通り、一番町の関係性や波及効果についてディスカッションする。

発言者②：私は、3年前まで市職員、現在は URL に所属し、公民連携に関わっている。街づくりをするにあたり行政と民間の思いがわかる立場で、いい街を作っていこうということを考えている。市役所の建て替えとその波及効果については、定禅寺通りを中心とした利活用について時代の変遷などを紹介したい。

昭和48年にデベロッパー委員会が設立され、民産官学が連携し、将来の街づくりのデザインを共に描いた。西公園と141の辺りまでグリーンモール化を目指した。これはプロムナード静的な関係で整備を行った。その後彫刻のある街づくりの動きがあり、何体かの彫刻が現在も展示されている。昭和62年に地下鉄が開業されるまでは東二番丁通りは直線ではなくS字の道路であった。それに合わせて道路の直線化、勾当台公園の再整備、地下の駐車場を含めて行った。そのあたりから、地域の旦那衆、発言者③さんなどが、市が整備してくれるものを受け入れるだけではなく、自分たちも積極的に関わり合い楽しい街にしていこうという動きが出てきた。定禅寺通りの計画幅員は変わっていないが、車

道と中央の遊歩道については、イベントを意識して構成を変えている。任意団体であるハロー定禅寺村が設立され、現在も続く、光のページェントやジャズフェスなどの元となった。これらのイベントは地域にとって無くてはならないイベント・賑わいになっている。ただ非日常による年1回とかのイベントなので、これらが日常の風景になるような仕掛けがあるといいと思う。例えばパリのシャンゼリゼのカフェのような景色、カフェでなくてもマルシェとかができる空間として展開して行きたいと考えている。

仙台市は制度を変えてきた実績がある。スパイクタイヤの粉塵問題から現在のスタッドレスタイヤが出てきた。現在は仙台駅周辺も密度が高くなってきて入るが、定禅寺通りが仙台人としてのアイデンティティを表出する場であると考えている。その延長に市役所があると考えべきだし、グランドレベルの在り方は街づくりを考えて活動していつ人間にとって関心が高い場であると思う。その一部として市役所も界限に含まれ切っても切れない関係はあった。現在はモール化ではなく市民活動の場へと移り替わっている。ここが一つの切り口かな。

発言者③：光のページェントやジャズフェスは仙台市の公園課と良好な関係にあり、スムーズに実施できている。戦災後の復興記念道路として定禅寺通りは建設されたわけで、8年前の震災後にもジャズフェスに参加されている岡崎さんが機材などを持ち込み、個人で公園課に申請し音楽イベントなどを行っていた。それをきっかけにハロー定禅寺村でも公園課と交渉し、年間を通じてスムーズに活動ができるように働きかけ、快く了解いただき、震災後30回/年のペースでチャリティーコンサートやコーヒーを出して開催している。その際募金を30~40万円/年、集まる。それを河北新報に預け半分を震災復興へ半分をジャズフェスの運営に使ってもらっている。この活動をとって被災地民とつながっていけることが最高だと思っている。それができるのもこの定禅寺通りがあるからこそ。

発言者④：市役所と商店街はそこないと困る関係。商店街のイベントは市役所の時計を見ながら進められることが重要。市役所、定禅寺、国分町、三越と連携し、35年たったアーケードの建て替えまたは新築を昨年から考え始め、ショッピングエリアとしてのゾーンをどのように考えるのかという段階に入ってきた。周囲の協議会と歩調を合わせながら、自分たちの段取りを考えている。三越は大店舗で北の入り口を守っていただいている。市役所は建物だけではなく、市民広場や勾当台公園も含めて市役所という認識があり、そこでのイベントによって商店街の人出にも顕著な影響が出ている。ページェントが1週間短くなることで、短縮機関の人出が減ることへの懸念が商店街で議論されている。イベントの有無が人の通りを変えるぐらい大きな問題につながる。なので、同じ場所で市役所が建て替えられることは、ありがたい話だと感じている。

発言者⑤：シェア型複合施設のディレクターをしている。春日町で運営し、フリーのクリエイターやスタートアップの企業様などが利用している施設。一部一部ペント施設として貸出しており、多様な人が出入りしています。個人としては長く公共施設の運営に携わり、個人やNPO支援の施設を仙台、多賀城、利府などで10年ほど手掛けている。このテーマは役所自体を缶に封じ込めるのではなく、外に沁みだしていくのかなあと考えている。地域のイベントは大小さまざまだが、数としては増えてきていると感じる。イベントは疲れる。継続させることが大事。仙台市としても予算化が難しく資金を市民イベントに投下させること自体が難しくなっているように感じる。助成金が民間の活動の足枷になることは避けるべき。それをあてに活動が行われるとなくなった瞬間に何もできなくなる。支援する側も考えないといけない。沁みだす関係を構築するためには、行政と民間をつなぐHUBのような人間が必要。両者は言語や組織のシステムが違う。翻訳できる人間が必要。今資源はあるので、キーマンがつなぎ直しをして、予算を大量投入するのではなく、収益を上げられるような仕組みや視点、方向性を検討しないとイケない。

発言者⑥：地元の仕事より他県やナショナルブランドにかかわる仕事が多く、常に外からみた仙台を意識していた状況にある。仙台らしさはどこにあるのか？定禅寺通りは杜の都の代名詞であり、ハードもソフトも充実しているし、市民活動のためのもので盛り上がっていると感じる。なのでスポットの当たらない仙台市について活動しており、広瀬川の景観や西公園の賑わいなどにもスポットを当ててほしい。現在の状況は市民だけでは対処できない。

官庁からの支援がないとやっていけない。仙台市の青写真が市民にとって分かりにくい。

多くの歴史的な建物は焼失してなくなっているが、探せば残っているものもある。そちらへの意識が乏しい。新庁舎と定禅寺の新しい関係は生まれるのだろうが、並行して定禅寺は商店街だけで終わるものではないので、西公園や広瀬川青葉山まで取り込んで、歴史の香りがする景観も含めて考える必要がある。市民にはこちらの景観が見落とされている。

発言者⑦：現在の街づくりはスクラップ&ビルドからソフトに移行している。仙台市まちづくり部会、北山、東口、新寺などにボランティアガイドを設け街歩きを企画し、街づくりのベースを勉強している。仙台人気質として、こだわりはあるが、古いものに対する意識が低いと思う。東京や大阪をものぐさ格好いいものを作るぞという気概の方が強いように感じる。多賀城に国府があるころから地域の顔になるものを作るという気質が連綿と根っこにあるのではないかと。街は発信するところから出来上がる。学生街、商店街、オフィス街としてすみわけを考えると市役所が街になり得るか。市民の多くは区役所で事足りるので行く機会

は非常に少ない。ということは魅力がない。市役所の2階から商店街はまっすぐ伸びてとても格好が良い。このロケーションは市民に開放すべきものだと感じる。商店街関係者にはこの視点に立ったアーケードの在り方も考えてほしい。上から見ると広場の桜は非常に美しい。

発言者⑧：テーマが多くまとめるのが大変。市役所、県庁、国の出先機関が構成し、広場ではイベントが使われている。しかし、旧県庁は解体され、出先機関も違う建て方が検討されたが、現状はこうです。副都心構想があったころであれば、ドラスティックな移管があったかもしれないが、現状においてはここでやるのが前提になっている。ビスタ地域にある古い民間ビルや点在する私有物件がどのように展開するのかは、この市役所の建て替えがモデルになると思われる。その結果が地域に波及すればいいと思う。

発言者①：見る。見られるの関係は視点として面白いと思う。仙台市と定禅寺通りの関係には広場がある関係でワンクッションある。奥州街道と官庁街が近接している関係は全国的にも珍しい。定禅寺を含み南側だけでなく、奥州街道を含めた西側への沁みだしもあるように感じる。春日町から見た定禅寺エリアはいかがか。

発言者⑤：当社で春日町近辺のみのMAPを作成した。50軒ほどの店舗があり、路地に広がっている。定禅寺側には、お店が集中したくさんの客が集まっている印象。さらに一番町商店側もイベントがあるとさらに集客が上がっている印象がある。現在は駅前も集客が高まっているが、そことは違う価値観を一番町側では提供すべきだと考えている。ごみごみしているよりはゆっくり。集客が上がれば経済効果は高まるだろうが、客単価を上げてゆっくりできるや一日そこで過ごせる仕組みや視点があってもいい。回遊できると差別化が図れるのでは。

発言者①：ぐるぐる、ゆっくりという意価値観は定禅寺側にはあるかと思う。歴史的な価値観からお話ありませんか？

発言者⑤：歴史的な建物はあまりない。しかし、春日町周辺は魅力的なレトロな建物や古い住宅などはある。しかし、建物自体に価値があるのではなくそこを使って展開しているショップなどのディスプレイや商品に魅力がある状況。

発言者⑥：春日町近辺は昭和の香りのする建物はある。これからは時間軸を伸ばすことが大事。建て替えは資金が必要。リノベーションで価値を上げる工夫が必要。その点在する場所から地域の魅力や情報を発信され、回遊されるようになるのでは。歴史的な建造物は非常に少ない。観光客が非日常的なイベントに参加して定禅寺通りを西公園まで行くということは考えにくい。その周辺まで含めて回遊性の高い景観や風景とすることで日常に落とし込むことが重要。定禅寺のストーリーテラーを作る取り組み押している。戦災で焼けて形はなくなっているが、その地域の付加価値や伊達家の武家屋敷、F.L.ライトの一番弟子の遠藤新の常盤木学園の白亜の校舎とか。西公園は文明開化の貢献した料亭挹翠館やアイン

シュタインも訪れた公会堂、宮沢賢治も参加した大博覧会など。話すと面白い内容が、回遊した時にあったらとても楽しいと思う。そういう仕組みが必要。

発言者①：一番町四丁目に回遊や歴史的ポイントはあるか。

発言者④：商店街の自慢は古いということだけ。50年ほどたつビルが6棟残っている。が、現状耐震性に乏しく、安心安全からほど遠いためオーナーと協議している。食の名物はあるが、駅前との差別化をどう考えるかは議論に上がる。アーケード商店街は6つあり一緒に頑張っていこうという方向に向かっており、アーケード単位の顔、らしさというものは徐々に消えつつある。四丁目商店街だけは全蓋型ではなく、緑と空があふれる商店街である。天気によって左右される商店街で、今後の展開が議論になっている。市役所の話に合わせ、商店街としても重い腰を上げ同じスピード感で動こうという機運が高まってきている。境界はロケーションが最高。観光資源も充実しているのに活かし切れていないということが残念。

現状は庁舎は別という協賛の仕方。これからは庁舎も会場として一緒に盛り上がる必要がある。

発言者③：店は43年目。昭和57年から現在地。以前はペーシェントの電球に2階から触れた。今では今は6階部分。根も伸びてきているし、ケヤキの保存も検討しないといけない。ここも含めて討論してほしい。定禅寺通りの全面歩道化は利害があるから難しいでしょうが、ケヤキの保存、回遊性含めてここをどういう状態にするのか考えないと。県民会館や市民会館では文化的なイベントが行われるが、利用者はそれを見たら速足で買えるだけ、5分でも10分でも立ち止まってこのいい空間を感じてほしい。

発言者②：歴史的に残すのも大事だけど、創ることも大事。市役所を終点ではなく起点で考えれば、商店街の縦動線だけでなく、西も北も関連が出てくる。この視点で見るといいと思う。市民は区役所が窓口。市役所はヘッドクォーターなのであまり関わりがない。物理的に容量が足りないので建て替えというのは仕方ないと思うが、市民との関係性で行くと、市民が求める区役所の役割とは違う関係性を市役所に求めるべきだと思う。従来の基盤整備は市民の話と無関係に進めてきて。今はなじまない。しかし、青葉通りは再整備したけど、市民が歩いているかということそうではない。誰が悪いのか？市役所だけが悪いのではなくどう使うかということを考えるときに市民を巻き込まなかったのが悪い。行政の限界。作れば成果が出る時代ではない。市民と行政が対等な立場で取り組まなければいけない。駅前は仙台の玄関口ではあるが顔ではない。ペDESTリアンデッキは日本一だが。やはり定禅寺通りや青葉通りが市民活動のメッカとしてあるべき、西公園までの境界を含めて。そこにPPP（公民連携）が出てくる。市役所の建て替えで立体構成をどうするかはあるが、少なくとも3階までの空

間、グランドレベルが市民活動の拠点となるべき。そうすることで日常的な風景の一部に市役所が取り込まれるのではないか。街を一緒に育てる、育む拠点としてみていく。上は執務積空間なので別にして。下は市民の普段使いできる空間とする。

発言者⑧：これまでは、各施設がそれぞれの単体として建設され、互いの関係性が構築できていないので。今回がそのきっかけとなるように動ければいい。グランドレベルの話としては18時に正門も締まり、基本的に閉庁する。時間以降もグランドレベルが突き抜けられる空間にすることが最初にすることだと思う。市民の広場や市政報告センター、姉妹都市のギャラリーなどあるが、こういう空間も含めあつという間に時間は来るので今のうちからトライアルしていかないといけない。

発言者①：回遊性から界限性について。グランドレベルにあってほしいもの。街に市役所の機能が染み出すことなどについて。

発言者②：グランドレベルに壁を作らず、市役所の中を通り抜けられることで、市民的な圧迫感が軽減される。緑地空間や広場の運営は、商店街に委託している。だから、いろいろな仕掛けや仕込みをしているのでうまくいっている。だから、庁舎のグランドレベルの運営を市民に委ねるとかそういう話なんだと思う。個人情報などを扱う市役所が情報漏洩など配慮しながらグランドレベルを管理すると何もできない。例えば横浜市役所の低層部の商業施設など発想としては近いものがあると思う。

発言者⑥：賛同する。現在の市民の広場や市政報告センター、姉妹都市のギャラリーを市役所だけでやろうとすると無理がある。もちろん管理する市役所が必要だが、開かれたスペースとしての機能は必要。眺めがいいのであれば最上階に展望レストラン。個人的には周囲に空地がたくさん確保できることを前提に高層でもいいと思う。今後の財政を考えるとすべてを役所にやらせてもらおうという考えは破綻している。官民が一緒のテーブルにつけるプラットホームを作り、寄り掛からず、寄り添うソフト面の受け皿を作ってほしい。

発言者②：発言者⑥さんの話もそうだと思うが、ハード面、ソフト面両面からやらないとうまくいかない。コーディネーターが必要。グランドレベルを開放しようと考えるのであれば、これまでの資源をつなぐ、または再構築できるような人物が必要になると思う。ハードを作ってもアクティビティーは生まれないので促進するハード+それを誘発できるコーディネーターが求められる。リーダーシップよりもいろいろな情報を持っている人が情報を発信又は収集できる人物が求められる。一人では多様性がなくなるので様々なバックグラウンドを持っているキーマンが欲しい。役所側にも市民側にも。空間あります。使ってくださいでは有効性は半減する。ただ、この役割は目に見えない部分が多いので評価され

にくいが、こういう人間が必要。

発言者④：バス再編で市役所、勾当台停車が減った。18時以降市役所わきのバス停があるが、雨降っても待機できる場所がない。なんで市役所を解放しないのだろう。グランドレベルを解放するのであれば、待合空間やATM機能を取り入れてほしい。震災時市役所は耐震性がなく、物資の配布すらできなかった。市民の逃げ場としては機能しない。そういう空間。通常は会議スペースでもいいが、観光地という割に安産性の高い空間が用意されていない。そのような機能も市役所に求めたい。18時以降も4丁目は国分町に隣接するため人通りも多い。21時程度まではグランドレベルが開いている状況が欲しい。市民も市役所も観光客もみんな有効だと思う。

発言者③：二口の奥に野尻地区がある。限界集落のようだ。同じ市として、この界限だけでなく、そういう全市にも波及できるような市役所づくりを検討しないとけないと思う。

発言者⑦：使い方はたくさん出たと思う。市役所前の噴水と四谷用水は関連しているのか？発信しないと人は来ないので、仙台市の魅力や有益な情報を発信すべきことを続けないとけない。市役所機転で考えたとき、ここで情報収集してもらって、買い物しながら歴史的な片平キャンパスまで行く、そこから地下鉄乗って西公園から定禅寺を進んで一番町に戻る回遊性などを作れるのではないか。VRを景観が見れる場所に設置し、古今の仙台を見比べるなど面白いのでは。

発言者①：街の中に市役所機能が染み出す機能について

発言者⑤：回遊させるなら点在でもコンパクトでもいいという考えも出てくる。現在の議論と逆行するが。

発言者④：まちくるなど現在も発信機能はあるが、設置位置や経済的な問題で現状の運営はどうなっているのか。

発言者⑤：波及効果といえば、商店街と庁舎機能を連続させるとかあってもいい。

発言者④：地下鉄の出入り口は近くまで来ているが、庁舎と連続していない。今後は市役所と連続し、商店街までつなげる機能は確保できるようになるのではないか。

発言者②：街を作るということは、経済的な効果が求められる。補助金でやるのではなく、稼ぐという切り口を含めて検討しないと継続した運営は難しい。指定管理制度のように資金を役所から投入するだけではだめ。市民が建て替えて見いだせる、自慢できる、をどのようにコミットするかが求められるのだと思う。それが何かを考えるのが非常に難しい。

発言者①：波及効果につながる仙台市役所のシンボルについて、

仙台市が市民とのインターフェイスとして用意した市内に点在する施設が、有効に活用されていない。新しい仕組みの中で変わっていかないとけない。これをこの建て替えに合わせて再構築を考えていかないとけない。

- 発言者⑤：市民から提出されたアイデアを、業者に委託して作るのではなく、市民が主体的に関与することで自分たちの施設としての認識を高めることができる。シンボルや関係性が波及効果につながるのでは。活動から運営も含めて。
- 発言者⑧：平成の大合併の時、保存期間を過ぎた重要である資料もだいぶ捨てられたことを聞いている。そのような資源をサルベージする活動があっても良い。
- 発言者⑥：見学会は事故とかあって実施するのは大変だと思うが、現場で起こっていることを公開できる範囲で発信するサイトを立上げたり、イメージもできるとうるさくとも我慢できる。設計者や施工者のつぶやきがあっても面白いのでは。
- 発言者⑤：子供たちは現場が好き、興味を持つきっかけになる。将来を担う子供地に感じてもらって、大人になった時に愛着を持ってもらえるようになってほしい。
- 発言者④：市役所の規模や機能がわからないうちにこんな部屋や空間はどうとか言っても、正直想像できない。もっと進んで青写真が見えた状態でこのような議論を再度行ってほしい。建て替え中の考え方も含めて示してほしい。
- 発言者②：今の建て替え計画は、噴水の場所に新築する。その間は、現庁舎で執務を行う。新築後北側の庁舎を解体し、周辺の庁舎にいる職員もこの新設庁舎に全部戻す計画である。これまでの市有建物をどのように活用するののかも含めて議論をしないと、地域の波及につながらない。新庁舎建設が出発点であって、最終形ではない。市民の欲求とこれまでの行政需要に差があるため、すべて既存の体制でやろうとすると限界が来る。なので、市民と役所でキャッチボールする必要が出てくる。このやり取りをするのが小野さんの言ったコーディネーターの役割であり、建設中の考え方も含めて検討することがとても良い視点であると思う。
- 発言者③：30年前のネオンの問題からいろいろあったが、定禅寺が一番好き。昔はトンボや虫取りができる環境がこの地域にはあった。そんな空間が再構築できたらうれしい。
- 発言者④：市役所の建て替えと一緒に商店街も再構成できるように頑張りたい。
- 発言者⑤：信頼関係や情報公開が必要。市民にゆだねる平均的な回答に陥る危険性も認識したうえで、市民と役所が協力し合える体制づくりが求められると思う。
- 発言者⑥：市民共同のプラットフォームづくりのトレーニングをする良い機会だと感じている。
- 発言者⑦：このようなテーマで協議できてよかった。死ぬ前に自分もこの仕事に関わったんだとっていかれたら最高です。
- 発言者②：市民共同でいう市民とは受益者市民であり、そこを取り入れようとするのは非常に難しい。我々のようなパブリックマインドを持った市民と行政がパートナーシップを結んで一般市民に情報を提供しないといけないと思いました。
- 発言者⑧：委員会の立場としては、どこまで税金を使っていいか合意をとれるかが気にな

っている。ここで話されたようなグランドレベルを考えるといくらかコストは高くなる。しかし、それは負担してもいいと感じられるかということもあり、今回のテーマがある。今回の議論などを通じて内容を固めていきたいと思う。

第1回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」

ー市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジウムー

テーブル®【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える。 **速報メモ**

■登壇者・担当者

企画担当 : 清本多恵子
 ファシリテーター : 内山隆弘
 ファシリ補佐 : 宮城県建築士会 清本多恵子・星ひとみ 撮影 : 岡本宇京・麓結

登壇者

佐藤 健	東北大学災害科学国際研究所教授
大沼正寛	東北工業大学ライフデザイン学部 教授
二郷 精	建築家・環境カウンセラー
木村浩二	せんだいコンセキ発掘塾塾長
田澤紘子	せんだい 3.11 メモリアル交流館
伊藤宣之	(株)仙台経済界 会長
針生承一	日本建築家協会 (JIA) 宮城地域会
高橋直子	宮城県建築士会
石原修治	宮城県建築士事務所協会

<前半>過去の伝統、経験を共有する

(発言者①) 前半では、語り継ぐべき「過去の伝統や経験」について、具体的なイメージをお話しいただきたい。場所の歴史、都市構造の中で勾当台エリアの意味、市庁舎建物の歴代の建物が市民にどういう風に見えていたか、災害の経験との関係、などをお話ししてほしい。後半には、前半で共有した「過去の伝統や経験」を語り継ぐための空間的・建築的・ソフト的なアイデアを出してもらいたい。

(発言者②・③) パワーポイントにて仙台市庁舎が建てられた場所の歴史、明治以降の市役所建築の写真を見る。(養賢堂の位置)市役所敷地の前にある道路の幅員が広がっている(表小路)。侍屋敷が大きな屋敷から小さな屋敷に変わってはいるが、道路の位置は変わっていない。仙台は江戸期にも地震が8回あった。道路が変わるくらいの変化は、地震などによるもの。市電もあった。仙台市役所の前停留所は「表小路」だった。その後、「県庁市役所前」になった。

(発言者①) 過去の歴史を見て良く分かった。建物の歴史や、使われ方や、これをどう継承するか、なども議論したい。

(発言者④) 基本構想検討委員会の委員だったときに「仙台市の顔となる建物をある程度のお金を掛けて作ってはどうか」と考えたし、「市民広場の重要性」も認識した。また今度建つ庁舎のボリューム感についてもなかなかイメージし辛いと感じた。現在の市庁舎建築の設計図を見たことがあるが、その図面は大変緻密だった。「時代が合わなくなったから建て直す」という発想はやめて「残すべき建物や部分をつくってゆく」ことが重要ではないか。歴史的に残したい「顔となるもの」を作れないか。「お金がないから云々」ではなく、歴史の継承を盛り込

んで、より良いものを建てた方が良いのではないか。

- (発言者⑤) 出身は名古屋で就職にて仙台に来たが、名古屋から仙台に来た時に「田舎だ」と感じるとともに、「杜の都」のイメージをととも感じた。都市計画家の作った名古屋の100M道路は素晴らしいが、無味乾燥だとも思う。仙台は緑豊かな、歩いていて楽しい道がある。都市のスケールがとともいい。子供会育成会連合会に所属しており、子供会のキャンプや紙相撲大会などのイベントをやっている。子供たちの視点で、どういう市役所だったらいいのか、という視点で語りたい。
- (発言者⑥) 前のルネッサンス様式の市役所は何故壊したのか、と思う。近代の明治以降の建物の保存について、自分は不満に思う。市はなぜ現在の建物を残すことを考えなかったか。BCS賞（日本建設業連合会により、日本国内の優秀な建築作品に与えられる賞。建築業協会（Building Contractors Society）の略。）をとっている。前回の建替えの際も、なぜ壊したのか。県庁舎しかり。近世・近代の建物保存に関して、仙台は大変に問題がある。宮城県庁舎の設計者と同じ設計者が、群馬の庁舎も建ており群馬は上手に残している。アメリカのプリマスは17世紀の建物を残し、大変魅力的である。それも市民の力で残して守っている。仙台はスクラップ&ビルドの意識が大変強すぎるのではないか。
- (発言者⑦) 仙台市教育委員会文化財課でながく古代の発掘をやっていた。現在市内に780か所の遺跡がある。素晴らしい遺跡があってもなかなか残されず悔しい思いをしている。仙台市内（仙台城下）の遺跡の中にある痕跡を集め、市民に紹介している。元禄期の絵図からみると、市役所の今の敷地は、侍屋敷6軒分の敷地でしかない。市役所の前だけ広がっている道路は、かつての養賢堂の正面にあたる。そういう痕跡が好きで探しているのも、そういうことを活かしながら設計してほしい。そういう過去を抹殺しないでほしい。市民にとって定禅寺通りは著名だが、定禅寺は知られていない。勾当台公園の「勾当」は、花村勾当から由来している。養賢堂は江戸の後期にここに移ってきた。江戸の中でも時間軸で変遷があるので、今後の建築にも活かせればと考えている。
- (発言者⑧) 自分が所属する市民文化事業団で市内10か所の運営をやっている。311メモリアル交流館は、地下鉄東西線の荒井駅の中にある施設。開館後丸3年経つが、まだ、足を運んでもらっていない人も多い。（パワポにて説明）施設が果たすべき役割として、仙台東部沿岸地域の変化に着目した展示を行っている。（元々の風景を知らない）はじめての来訪者にとっては、現状の寂しい風景しか分からない。かつての風景を知ってもらうための展示もある。例えば「竹で遊ぶ」企画展をやっている。震災で「いぐね」が殆ど駄目になり現在見えてきたのが「竹林」。現場により近い交流館であるからこそできることがあると自覚している。また震災時の中心部の経験も大事だと考えている。仙台市の伝承は、中心部と沿岸部の二拠点化の方向で整備が進む。それを踏まえ、市役所建替えに合わせて、震災の記憶をどう伝えてゆけるのか、より俯瞰的な視点で伝えることも必要だと思う。
- (発言者⑨) 今日の立場は災害からの観点、という事で話す。基本構想の基本コンセプトの4本柱の一つは、災害対策である。歴史からみても、これまでもこれからも短いインターバルで、宮城県沖地震程度のM7程度の地震は続くと思う。「行政機能が震災時も維持するか」どうかについて仙台は試されていると思う。免振や制振など、なんらかの地震応答を低減することは必要。新市庁舎の防災性については、これまでの経験を活かすべきだと思う。

(発言者⑩) 仙台で37年雑誌を作っており現在は会長職。37年前に雑誌をつくるにあたり、第1次産業の農業、第2次産業の雑誌をつくっても売れず、第3次産業の「卸し・小売り・観光」の雑誌を作ったらなんとか売れた。「卸し・小売り・観光」は街づくりと密接に関係していると思う。昔、仙台市役所を西公園側に移す計画があった際、商店街とともにクレームをつけたことがあった。仙台市は市民にはリノベーションを勧めているのに、本庁舎は何故建替えが前提なのかは大変疑問である。大崎市出身だが思うに、「仙台らしさ」とは「曖昧さ・自己主張をしない・個性を出さない」ことではないか。札幌・福岡など成長している都市は、個性を出す都市だと思う。

(発言者⑪) 若いころ、建物保存の活動を熱心にした時期がある。「建物を残せない」ことが仙台らしさなのかは問いたい。保存運動をしてきたときに、市の担当者から「来るのが30年遅い」と言われた。若い人が古いものの価値を見出した時に、何も覆せず、排除をしてきた歴史が仙台にはある。仙台市街地は侍屋敷だらけの町だったので、節度の利いた冒険的でない風土だったとも思うが、「都市の形態」は美しいと思う。そういう意味では都市計画が良かったのかもしれない。残すべきものは出来れば残したいと思うし、空間として残っているもの(空、見通し、ビスタ)も残したい。仙台が出来て400年だが「ちゃんとした都市になるには500年はかかる」とも思う。という時間軸で考えれば「あと百年後を目指して市役所は何を建てるのか」についても考えていきたい。様々な施設がいつも移転をしているので、市民から見れば、いつも施設は「分散」していると思う。分散を否定して集約するのではなく、分散をうまく利用し、区役所もうまく機能させていくことも可能ではないか。

<後半>

(発言者①) 過去の伝統や経験・歴史をどう未来に繋ぐかのアイデアを議論しようという主旨です。近代の価値をどうつないでいくか。前半の議論で「空間のスケール」や「景観の構造」などの話題があったが、それについて議論したい。もうひとつ、過去の経験をどうやって伝えていくかソフト的な方法を議論したい。最後に、「近代建築」について、その価値や「保存すべきかどうか」についても議論したい。基本構想の段階で、仙台市で行ってきた空間スタディについて、委員であった発言者④さんから概要を説明してほしい。

(発言者④) 「敷地に建物を建てましょう」という事だけが決まっている。建物のボリュームについては、分散している庁舎を合算してそれを根拠に算出している。場所として高さ80mしか建てられないので、1棟案、又は2棟案が検討されている。ボリュームのイメージは県庁舎の真ん中の棟のようなもの。建て替え計画としては、仮庁舎を建てることはお金が掛るのでやめたいという方針がある。

(発言者⑪) 質問だが、50年後には人口減少をしていると思われるが、庁舎面積の未来像としてそういう話題は無かったのか。

(発言者④) 当然、そういった議論はあった。テレワークなど働き方も多様になるのでそういったことも加味すべきだと思う。

(発言者⑤) 市庁舎の建て替えに関しては、「杜の都」としてのイメージ・景観を体現する市庁舎が良いと思う。そう考えると、空地进行を多くとりオープンスペースを確保するかが、今後の議論

の焦点かと思う。「現在地に建て替えをする」という事が決まっている以上、これまでの素晴らしいイベントがますます広がっていく空間づくり（市民が使えるスペース）が大事だと思う。現在は、（ジャズフェスなどイベントを行っている）市民広場の向こう側の市役所が閑散としている。そういった「官庁街風」のづくりではよくないと思う。

（発言者⑦）「建築場所はそこでいいのか、もっとよそにも相応しい場所があるのでは」と思う。「仙台」という地名の由来は、政宗が自分を仙人となぞらえ、「仙人」が住む台地、という意味である。例えば、「川内」という地名も東京の「丸の内」と同じ意味である。そういった意味では「川内」に良い場所はないかと考える。本庁舎を統合するのは大事かもしれないが、たった侍屋敷6軒分の敷地でいいのか、そのような狭い敷地に、災害に強い建物はできるのか、と思う。また、市庁舎の敷地の中に、江戸時代の四ツ谷用水の3本の支流のうちの1本がある。せめて、その四ツ谷用水を復元してはいいのではないか。緑と水を大切にするというコンセプトではダメだろうか。

（発言者⑪）地下鉄東西線の不振が言われているが、市庁舎をより分散化し、地下鉄駅の2駅に1つずつ建てる、などというアイデアは駄目だろうか。新しいことをやろうと思っても、常に古くなるから、それくらい大胆でもいいのではないか。

（発言者⑩）「中心部の地盤沈下」も課題だと思う。東北大農学部跡地が開発され、都市構造が大きく変わる時期かと思う。「市庁舎を今のところに立て直す」ということは、周辺地域にとっても大きな影響がある。「もっと大きなエリアをみて、絵を描く・再整備する」くらいの大きな視点があっても良いのではないか。災害時に問題になりそうな場所もあるので、そういう場所も含めて、大きく計画する必要があるのではないか。

2045年に仙台市の人口が90万人だという予想がある。しかも15歳から30歳の女性人口が減る。若い女性の多くは仙台駅前行き、一番町周囲はお年寄りが中心の空間である。その延長線にあるのが市役所。建て替えが決まっているのであれば、街づくりに関わっている市民の方が加わって「こういう市役所がほしい」という議論をする必要である。もっともっとまちづくりについて議論してほしい。市役所建替えは、即ち、周辺整備と一体だと思う。古いものを補強し「仙台らしさ」を残しながら進めて欲しい。

仙台には、迎賓館、お客様が来ても歓迎する場所がない。建替えるならばそのようなことを想定したつくりとしてほしい。出来れば、そこに養賢堂の復原をして迎賓館として活用はできないか。例えば台原森林公園にある文学館や科学館は遠くて不便なので、客が少ない。それを庁舎の1階・2階に設け、多くの人に来てもらう施設としてはどうかと思う。

また、個人所蔵の美術品やそれを寄贈されたものが多くあるようなので、個人から寄付された絵画や美術品を、展示することはできないかと思う。

（発言者③）基本計画の段階でこう言った話が出来る機会をつくってもらったのは、仙台市の事業計画の中でも初めてだと思う。しかし本来は、市役所建替えの基本構想ができる前の段階でこういう機会でも市民の意見を聞いて欲しかった。2019年4月1日から文化財保護法が改正される中で、計画をつくる前に「市民の意見を聞いて計画するのが望ましい」という記載があるが、仙台市は計画案をつくってしまってパブリックコメントだけを取っているようだ。こういう話し合いの機会が、もっと前にやってほしかった。

また、仙台にとって四ツ谷用水は生命線であった。それはきちんと伝承すべきだと思う。

- 「本庁舎の完全な保存を主張する」気はないが、「(時間稼ぎのために建物を仮に補強して) 現市庁舎を残すかどうかの再検討をすることはできないのか」と思う。
- (発言者④) コンクリートの中性化が課題となっており、基本構想では、8年後を使用限界としている。
- (発言者⑥) 現市庁舎を残すことに100億円くらいかけても良いと思う。それくらいお金を掛ければ十分にやれると思う。
- (発言者①) 「こういう機会が設けられた」ということは大変画期的だと思う。この会議は何度か連続して行われるので、それを基本設計に盛り込んでいける筈だと思う。
- 「近代の建築(コンクリート造のモダニズム建築)」についての価値づけ、昭和40年代に建てられた建物の価値が共有されていないと思う。
- (発言者⑥) 「壊すことを前提に話していること」が問題だと思う。残すことを前提になぜ話をしないのか。自分としては、低層棟も含めてすべてを残したい。考え方としては防災上、1棟型は良くないと思う。群建築としてのほうが、防災上すぐれていると思う。「残したうえでどうつくるか」を考えたい。発言者⑥案を提示(現庁舎・議会を保存し、不足のボリュームを噴水と市民広場の一部に表小路を跨いで配置。一階を全てピロティとし、壁面の大部分を緑化する案)。
- (発言者①) 空間としてのイメージを具体的に提示してもらったが、その提案のひとつに「群としての建築」という事があると思う。「緑の建築」という提案もあった。
- それ以外の都市空間としての空間の意見はないだろうか。
- (発言者③) 30年に一度の地震に備えれば、仙台市中央部には、避難所が殆どない。1階部分に避難所を兼ねた多目的なホールがあっても良い。防災センターの機能を持たせるべきだと思う。また、ゼロエネルギービルや、50年後の交通問題などの検証も必要だと思う。
- (発言者⑨) 1棟案は課題が多いという部分では、複数棟としてリスク分散することは重要だと思う。防災教育に関わる機会も多いが、市庁舎を防災教育の教材にして欲しいと思う。免振・制振の様々なデバイスや備蓄しているものを見られたり、といったように、子供たちに学んでもらえるよう、積極的に防災教育の教材としてほしい。
- (発言者⑥) 2009年に竣工した八戸観光交流施設ハッチは、避難場所として有効活用した。免振・床暖・自家発電機能を備えたためお金が掛ってしまったが、最初は誰も来なかった。311以降避難所として機能し、その後人気施設になった。
- (発言者①) 災害時に能力を保ち続けることは、防災とエネルギーと交通をすべて検討していなければ達成できないと感じた。そういう意味でこの3点は繋がっていると思う。
- (発言者⑧) 発言者⑥さんの複数棟案では、棟と棟の間に横丁空間をつくるというような話と受け止めたが、そういう界隈性を大切に、市民の拠り所となってほしいと思う。過去と未来を繋ぐのは市民の対話でしかないと思うが、それが現在の庁舎の機能にはないのではないのか。計画することは難しいかもしれないが、「市民力をもっと引き出せるような施設」が良いと思う。建物の中から外の市民活動が見られたり、過去～現在～未来をつなぐ施設として出来ると思う。
- (発言者⑪) 「庁舎ボリュームが増えてしまう問題」を考えると、必ずしも全部盛り込むのではなく、分散してしまうものを連携させることも考えてはと思う。仙台は、城下がひろく市域が広いので、そういう視点をやはり持つべきだと思う。

保存の話になった場合、「モダニズム建築は個性が出にくいので」云々といった話になる。

「経年醸成化」とは何かと考えると「愛着・風合い美・歴史性」である。それは誰が決めるのかと考えると「市民」が決めるべきだと思う。

(発言者①) 色々な視点がでたと思う。ラウンドテーブルは今後も何度か続くと聞いている。その中でもっと深めていければと思っている。

(発言者⑩) 少子高齢化が迫っている。人口が減るのに、そんなに大きな建物がいるのかと思う。一か所に集める必要性について議論し、分散化を考えるべきではないか。観光課は駅前に、産業化は町中に、という考えもある。周辺についての議論も必要である。

(発言者①) 「全体の中でのネットワーク（仙台全体の中での勾当台エリアの位置づけ）」や「近代建築の価値の問題」などは語り残しているので、これから深めていきたい。